

# 津ライスニュース

## 平成29年産水稲 作柄報告版

平成29年11月6日

津地域農業改良普及センター

電話：059-223-5103

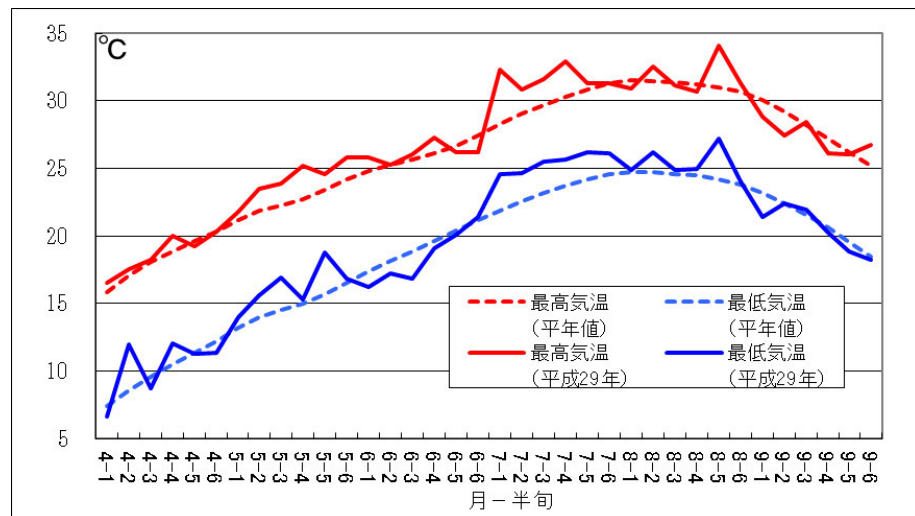
### 平成29年産水稲の作柄

### 作況指数95（三重県及び中勢）の「やや不良」

#### 気象経過

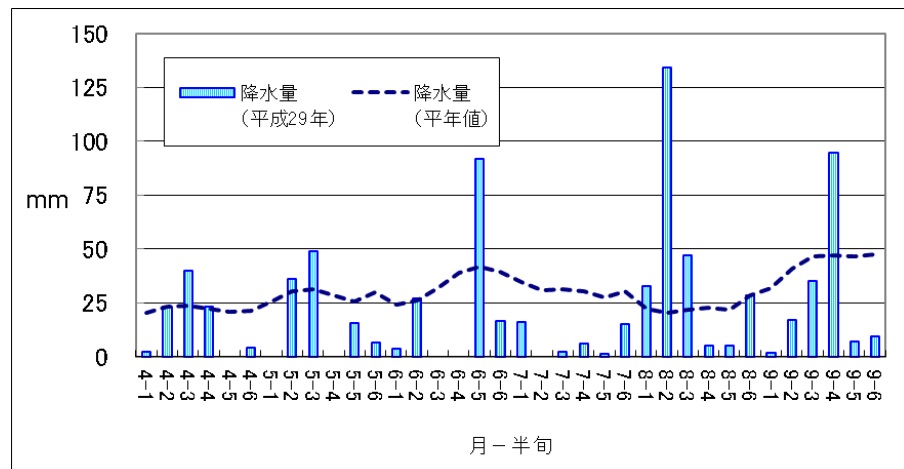
##### < 気温 >

4月～5月にかけて気温はやや高めでしたが、6月は平年並みとなりました。7月は最高・最低気温とも平年よりかなり高く推移しました。8月に入り気温はほぼ平年並みとなりましたが、また、8月第5半旬には高く経過しました。9月は平年並みに推移しました。



##### < 降水量 >

5月中旬は曇天日が続いたものの、その後、7月下旬にかけては、降水量はかなり少なく経過しました。梅雨入りは、6月21日と平年に比べ13日遅くなり、梅雨明けは7月15日と平年に比べ6日早くなりました。6月第5半旬と、台風の影響から8月第2半旬、9月第4半旬にまとまった降雨がありました。

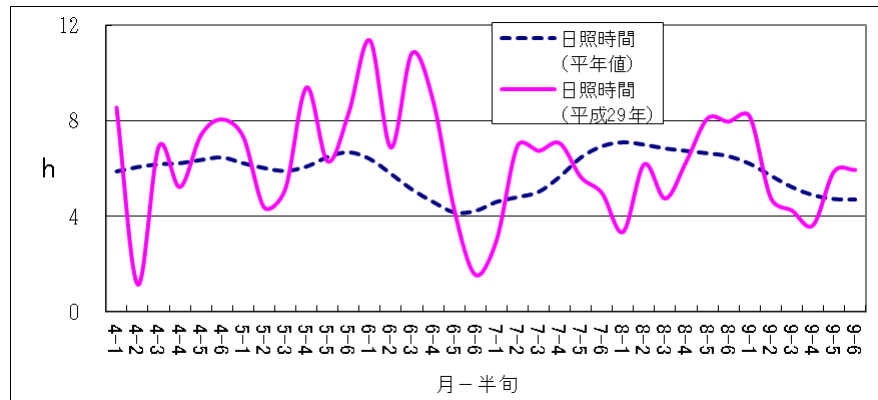


### <日照時間>

5月～6月第4半旬にかけて日照時間は、平年に比べかなり多く経過しました。

7月中旬は晴天の日が多かったことから平年をやや上回りましたが、6月第5

半旬以降はぐずついた日が多く、特に8月第1半旬～第3半旬にかけて、日照時間は平年を大きく下回りました。



## 生育経過

### <早期栽培の概要>

津管内の水稲は、冬季～春先にかけての降水量が例年の7割ほどと少なく、代掻き時の用水不足が心配されましたが、田植作業は4月中旬より順調に実施されました。しかし一部では、田植後に用水が非常に少なく、雑草が多発したり、分けつが抑制されたところがありました。

田植後、高温多照に経過し、殆どの水稲の初期生育は順調に経過し、短稈多けつ型の生育となりました。しかし、登熟期初期に台風5号の影響から日照不足が長く続き、また、局地的な豪雨により部分倒伏しているほ場が散見されました。こうしたことから粒張りが劣り、乳白粒の発生が多くなり収量・品質は平年を大きく下回りました(「作況95」10月15日現在)。稔実歩合は比較的良好でしたが、屑米(1.85mm以下)が多く、コシヒカリの単収は昨年に比べ1俵～1.5俵少ない状況となりました。病害虫としては、いもち病は少ない反面、紋枯病はほ場により目立つところがありました。また、出穂の早い品種ではカメムシ類により不稔粒がみられました。

### <普通期栽培の概要>

普通期栽培の水稲では、育苗期間に高温・多湿傾向となった影響で、苗いもちの発生が散見されました。田植作業は、概ね用水は確保されていて、5月下旬から6月中旬にかけて順調に行われました。低温や強風による植え痛みもなく、初期生育は順調でした。出穂期、成熟期はほぼ平年並みとなりました。

幼穂形成期の日照不足から有効茎歩合が劣り、 $m^2$ 当たり穂数が少なくなりました。台風18号の影響から倒伏、その後穂発芽したほ場があり減収につながりました。また、9月下旬以降、水田へのミナミアオカメムシの飛来が多く、斑点米等の着色粒の発生が目立ちました。

### <収量・品質の概要>

コシヒカリの成熟期調査では、稈長、穂長はやや短く、穂数は有効茎歩合は劣り平年並みとなりました。また、出穂期は平年に比べ2～3日早くなっていましたが、成熟期は登熟期の日照不足となびき倒伏から平年並み～やや遅くなりました。

#### 水稻生育基準田の成熟期調査結果

作期	品種	調査地点	移植日	出穂期	成熟期	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )
早期	コシヒカリ	殿村	4月20日	7月16日	8月25日	85	18.2	358
		安濃	4月23日	7月19日	8月25日	79.2	18.1	232
		井生	4月29日	7月17日	8月27日	79.8	17.7	372
普通期	きぬむすめ	高野	6月14日	8月24日	10月6日	83.2	18.0	278

#### 水稻生育基準田の収量調査結果

作期	品種	調査地点	わら重 (kg/10a)	精玄米重 (kg/10a)	屑米重 (kg/10a)	千粒重 (g)	1穂粒数 (粒)	登熟歩合 (%)
早期	コシヒカリ	安濃	401	356	13.5	21.5	70.9	83.1
		井生	606	497	19.5	22.7	61.3	83.1
普通期	きぬむすめ	高野	756	468	18	22.5	77.9	77.3

幼穂形成期～登熟初期の日照不足により1穂粒数、m<sup>2</sup>当たり総粒数が少なくなったこと、粒張りが劣ったことが減収につながったと考えます。また、出穂後の日照不足、なびき倒伏したことから、乳白粒、基部未熟粒の発生が多く品質低下を招きました。カメムシ類による斑点米、黒点米もありましたが、色彩選別機で除去されたところが多くありました。

平成29年産米の農産物検査結果によると、水稻うるち玄米の1等米比率は、県全体では1等33.6%と、昨年(1等62.7%)と比べて非常に悪くなりました。

品種別には、作付比率が高いコシヒカリ、キヌヒカリで1等比率が特に低くなりました。みえのえみ、三重23号は1等比率は高く昨年並みとなっています。2等以下に格付けされた主な理由は、「心白・基部未熟」「整粒不足」「着色粒(カメムシ類)」となっています。8月以降の日照不足、強風雨、カメムシ類の多発が登熟に大きく影響したものであると思われます。

#### H29年産米検査等級比率 (H29.10末現在)

品種	1等	2等	3等	規格外
うるち米	33.6	64.9	1.5	0.0
コシヒカリ	21.3	77.2	1.4	0.0
(管内)	22.9	76.1	1.1	0.0
(昨年)	62.7	36.6	0.7	0.0
キヌヒカリ	21.5	76.8	1.5	0.1
みえのゆめ	70.5	28.0	1.5	0.0
三重23号	99.9	0.1	0.0	0.0

(全農みえ調べ)

## <雑草・病害虫の概要>

### ・難防除雑草

ほ場によってはホタルイ、イヌビエ、クサネム等の雑草が多発したところが見られました。耕種的防除と組み合わせた除草剤体系と適切な水管理等が重要となります。また、雑草イネは、防除の効果がみられ、全体的には発生は減少したものの、一部で発生が目立つほ場も見られました。引き続き、適切な防除が重要となります。

### ・いもち病・紋枯病

いもち病については、6月中旬以降定期的に感染好適条件が現れたことから、防除の徹底等呼びかけたところですが、穂いもちの発生に至るまでの被害はほとんどありませんでした。箱施用剤使用や、適期防除など引き続き啓発する必要があります。

紋枯病の病原菌は、ほ場内および近隣のイネ科・カヤツリグサ科雑草で越冬するため、冬季の畦畔雑草防除が必要です。また、紋枯病が発生したほ場では翌年の水稲作でも発生が多くなる傾向があるため、翌年の水稲作では適切な防除も重要となります。

### ・その他の病害

ごま葉枯れ病は、例年と同様にみえのゆめでの発生が目立ちました。

### ・斑点米カメムシ類

本年は、カメムシ類の発生時期が出穂の早い水稲はクモヘリカメムシ、出穂の遅い水稲はミナミアオカメムシによる被害が多く見られました。カメムシ類被害対策として、ほ場周囲の荒廃地対策や草刈り、農薬の一斉防除など防除の徹底化が必要です。

### ・ジャンボタニシ

近年スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)の発生が問題になっており、津管内でも一部地域で発生が目立ちました。水口や水尻に金網またはネットを貼り、ほ場への侵入を防ぐとともに、発生した場合は、薬剤防除等の適切な防除が必要です。また、越冬場所を除去するための、排水路の泥上げや畦畔の雑草除去も効果的です。ジャンボタニシの防除には、地域全体で行うとより効果的です。



卵塊



成貝

## 品質向上にむけた次年度の対策

### <白未熟粒を発生させない>

白未熟粒とは米の内部が白く濁るものであり、乳白粒、背白粒、腹白粒、基白粒などをいいます。等級を下げるだけでなく、品質面で消費者からも嫌われます。本年も白未熟粒(特に乳白粒・基部未熟粒)が格付低下の要因の1つとなりました。

#### 心白

#### 腹白



白未熟粒軽減対策として次のことが考えられます。

#### 登熟期の水管理

中干し以降は間断灌水に心がけ、落水は収穫7日前以降としましょう。

暑い日中は水温も高いので、夜間通水等により稲体を休める方が効果的です。

なお、近年の夏は少雨傾向であり、高温年には干ばつが懸念されます。湯水時の対応として、湛水でなくても湿潤な状態を保つことが可能であれば実施してみてください。

#### 施肥管理(生育後半の窒素を高める)

生育後半の肥料不足が白未熟粒の原因となっています。穂肥の時期をやや遅め(1回目は出穂15日前頃)にし、高温年は2回目の穂肥をやや多めにしましょう。幼穂形成期以降の溶出割合を高めた緩効性肥料も開発されています。また、堆肥、ケイ酸資材の施用及び深耕により、作土を深くすることも効果的です。

### <倒伏させない>

草丈を抑制し倒れにくい稲を作るために、育苗の段階から次の項目に気をつけて作業をしましょう。

- ・丈夫な苗の確保...茎が太く徒長していない苗を植えましょう。
- ・適正な植え付け本数...太植えは茎数過多となり、茎が細くなります
- ・適正な基肥量...窒素過多は生育過剰となります。
- ・適正な水管理...こまめな水管理(間断灌水)と中干しにより田面を硬くします。
- ・ケイ酸資材の施用...ケイ酸を吸収させると光合成能力が高まり、稲を丈夫にします。
- ・紋枯病防除...株元を枯らす紋枯病は倒伏につながります。

### <籾数を抑える>

前半の生育を抑制して、籾数過多を避けましょう。そのためには特に幼穂形成期以降の肥培管理や水管理が重要です。穂肥が早すぎると籾数過多となりやすいので、栽培こよみや生育状況を見ながら、適正な時期に適量を施肥するようにしましょう。また、曇雨天が続く場合は、一度に施さずに分施しましょう。